著書頗る多し。史書としては『東方人民の古代史』尤も行はれ、又一八九五―九九年出版の『古典東方の人民の古代史』三冊あり、セース博士の監修の下に『文明の曙』『國民の衝突』『帝國の凋落』と題して英譯せられ、エヅワード・マイヤの古代史出現前には稀有の好證典たりき。

批評

大類博士の『西洋時代史觀中世』を讀む

文學士　植村清之助

一

本邦史界に於て、西洋史學の分野は累年不振寂莫の境を脱し得ない。公刊の新著も多くは教育上の參考書か際物的性質のものであつて、學術上價値の高い研究が發表せらるゝ事は甚だ稀である。これは一面斯學の專攻者が尠く、從つてこれが論究に任ずる學界が殆ど認められないに由るのであるが、更に深い理由は、一般に、西洋史學の研究が我邦人によつて無意義なことであり、徒勞に過ぎないと信ぜられて居るからであらう。即ちその研究の基礎となるべき史料を蒐集することの困難な我國に於て、西洋史學者が今日の進歩したる科學的方法に基いて根本研究の成果を擧ぐることは到底不可能事である、それで斯學の知識は實用上教育上肝要なものであり、又學術上に於ても國史學に對し比較研究の爲に必須缺くべからざるものではあるが、其獨立的學問としての存在の意義は甚だ薄弱であつて、これが專攻研鑽は畢竟徒爾であると、斯樣に考られて居るのである。この說は一應道理なやうではあるが、余輩はこれを以て史學の研究に二段のプロセスがあることを考へない議

論であると思惟する。二段のプロセスといふのは即ち史料の批判史實の確定を目的とする所謂 analytical operations と、解說綜合復活の synthetic operations とを指すのである。勿論この二者は研究の手續上、截然と區別せらるべきものではないが、しかしこれは必ずしも恒に同一人士の手を俟つを要しないのであつて、信憑すべき學者の確實なる科學的批判によつて確定せられた個々の事實を用ひて、史的發展の眞相過去の生命を把握するのは毫も差支へないことであらう。自然科學の場合のやうに直接經驗に據ることが出來ない史學の研究には、個々史實の獲得に多大の勞苦を要するのであるから、史的發展の全般的研究に際して、各方面の關係事實を盡く根本的に吟味査定することは不可能事で、多くの場合他人の研究成果を採用せねばならない、而もこの第二過程たる synthetic operations は史學研究法上史料批判、史實確定と對應すべき極めて重要なる位置を占むるものである。即ち第一過程で確定せられた稀少なる史實は、此處に至り幾段の想像推定を加へられて其眞意義が闡明せられ、その連結綜合から成うた複合體に新しい生命が甦つて、過去發展の實相が表現せられるのである。それで全然同一史實の集積から出發した綜合的研究が、研究者の態度見解の相違せる爲、全く異つた結果を齎らすことゝなつた實例は決して尠くないのである。吾が西洋史學の研究はこの synthesis の手續に基礎を置くことによつて、初めて其意義及價値を認められるであらう。いふ迄もなく我邦人は其思想經歷に於て西洋人と根本的に相異つて居るのであるから、その嚴正なる史的研究は、動やもすれば自己の人種的國民的偏見に陷り易い西洋史家の蒙を啓くことが出來る譯である。殊に近時勃興し來つた所謂文化史的研究に於ては舊來の政治史と異り、益々以上

の如き外人の綜合研究を必要とすべきである。これは我國史の場合に於ても同樣であつて、吾人の西洋史研究よりも數層倍困難である西洋人の我國史研究も學問上全く無意義として棄つべきではなく、往々彼等よりして極めて興味ある推斷結論を得ることもある、これは全く外人の觀察が我邦人と特異であるに由らう。

余輩は右のやうな見解からして西洋史學研究の學問的意義が存立すべき根據を認め、從來のやうな拔萃的飜譯を能とする著述の多い間から、眞個の研究的發表と稱すべき著述の續出せんことを切望して已まないのである。今度大類博士が公にせられた『西洋時代史觀　中世』は、確かに斯樣な要望を充たすに足るべき良著であらうと考へる。博士の人格と學識とに敬服せる余輩は本書の發刊を耳にしてから、多大の期待を懷き衷心の喜悅を禁じ得なかつたのである。それで本書を接手すると早速深い感興を覺えつゝ繙讀したのであるが、本書の性質が通俗的で一般人士の讀物たるを目的とせられ、稍興味本位に傾いて居るのは聊か余輩に失望の感を起さしめたのであつた。然しながら本來學術上の名著はそれが專門的であるか通俗的であるかにより其價値を左右するものではなく、尊重すべき學者の著述は通俗向のものにも優れたる見識抱負は窺知せられるのであるから、本書も其平易なる章句の間に博士の中世史に對する造詣の深いことが仄見ゆるのである。それで余輩は此際聊か本書に對する卑見を縷陳して博士の高敎を仰がうと考へ、此一篇を草することゝした。

二

本書は著者が卷頭の序文中に「主として中世高潮期とも云ふべき封建時代を論じたのである」と云はれて居るやうに文化史的見地に立つて封建制時代の社會生活文化狀態の實相を論述することが

本書の中心骨子を成して居るのである。著者は第一章「封建時代を顧みて」に於て、不安動搖の過渡期に際せる現代生活にありては、よしや嚴しい束縛の下にあり、沈滯の空氣に滿ちて居つたにせよ安靜固定の生活を娛しみ得た封建時代を談望し憧憬せねばならぬと說かれ、最後の第十九章に於ても「殊に不安なる現代に生活する吾人は或意味に於て封建的精神の價値を認めねばならぬ」と結ばれて居る。史家の立場として余輩はこの見解には甚だ不同意ではあるが、今はこの問題に就いて左右論することはせない。それで本書の內容は、右の如き著者の主意からして第七章「チャールス大帝」迄の所謂中世前期の記述は「封建時代の由來を說明するに必要なる程度に止めて」比較的簡略に叙說せられ、第八章「封建制度の由來」以下は本篇の主要部であつて封建時代の社會、國家の組織性質、諸國家の變遷を初め、宗教軍事の兩方面、武士生活の實相、思想美術界、經濟生活、都市の興起、封建の末路に至る迄精到なる論述を遂げられて居る。本書は斯樣な主意と結構との下に封建時代の文化諸現象に亘つて其實相を捉へ、これを綜合的に其根基たる社會全生活の心理から解釋して、時代の普遍的面目を活々と寫し出されたものであつて、加ふるに著者一流の暢達流麗な文章は讀過甚深なる感興を惹き起さしめ中世封建の社會文化を讀者の眼前に躍如として泛ばしめるやうである。

しかし斯樣に著者が中世期の主要部を封建時代に置き、封建制を基本とした時代文化の闡明を以て中世史觀の骨子とせられたことは興味ある觀察ではあるが、これには隨分議論のあることゝ思はれるのである。封建制は中世の初期に於て其萠芽を發し、大體から云へば其發達變遷は中世史の推移と殆ど相終始するもので著者の所謂中世高潮期

は封建制の完成時代と稱し得らるゝのであつて、當期の政治及社會組織を規定せる封建制は、最も顯著に時代文化社會生活の特色を表現して居るのであるから、中世文化史の中心事實を封建制にとり、該制の完成時代を以て中世の主要部幹體と見做すことは確かに妥當の見解である。然しながら一面から觀れば斯樣な政治的社會的制度は絶えず動搖して居つたもので其完成期は又既に崩壞に向ひつゝあつた時期である。所謂中世高潮期は外面上封建制が殆ど完成した時代のやうな觀があるけれども、內面には此制度が既に崩壞の氣を示し居る。王權の伸張都市の興起はこの事實を證明して居るのである。此時に於て王權及都市は猶封建組織の內に包容せしめられて居るが、其內實には新しい氣運を齎して居る。武士階級の完成は同時に彼等が社會的に無氣力となるべき兆候を現はして居る。時代思潮は漸く混亂に向ひ幾多の現實は矛盾撞着に充ち革新の氣は既に動いて居つたのである。勿論斯樣な形勢は中世の晩期に著しくなつて來るのであるが、既にこの時代に於て外面舊態を裝ひながら、新しい生氣を包藏せる諸現象が到處に現はれて居る。即ち封建制の完成期は一面安固停滯の狀態を示して居るけれども、他面に於ては動搖混亂と新氣運の發動とが窺はれるのである。それであるから封建時代即ち中世高潮期なるものを中世史の主要部とし、該時期の社會文化を以て中世時代を代表せしめるよりは、矢張中世期全般を通じ發展推移の眞相を觀察する方が適切であり合理的であらうと思はれる。それで吾人の觀察を中世期全般に向けたならば、封建制度其ものを此時代の中心事實とすることも、少しく不穩當となりはすまいか。

三

余輩は中世史觀察上從來諸學者の說くやうに、

此時代を一つの大なる過渡期と觀て、古代文化（基督敎の東方文化をも含む）とゲルマニ文化との對立融合の過程に着眼し、これを中世史考察の最重要な中心事實とすることが當代文化攻究の最も適切な態度方法の一つであらうと考へる。舊時動やもすれば中世期を暗黑時代と見做し、此間文化は東方ビザンツ及モスレム敎國に保存せられたのみで、中部歐洲の社會は古代文明と沒交涉の狀態にあつて、無智蒙昧、殺伐な鬪爭をこと〻して居た時代としたことの誤であるは云ふ迄もないことである。かの文藝復興は昏冥の世界に突如として古代文明の燦爛たる光輝を引き入れたのではない。この時期を通じてクラシック文化は、中世歐洲の文藝學術に現はれ其命脈を保持したのみならず、ゲルマニの政治及社會生活に甚大なる影響を及ぼして居るのであつて、近世歐洲社會の形成は、實に中世一千年間に行はれた古代及ゲルマニ兩文化の融合混成に其基礎を置いて居るのである。異種文化の接觸融合といふことが史家の最も興味ある研究問題の一つでありとすれば中世期はこの點からして甚だ價値ある時代と云はねばならぬ。それであるから當代史觀の一つの中心をこの兩文化融和の過程に置くのは極めて興味ある事であらう。かくすれば所謂中世前期も後期に劣らず重要な部分となるのである。またかの封建制も其成立の根本條件は社會進化の過程に存することではあるが歐洲中世期に現はれたやうな制度組織は實にこの兩文化融合の成果の一つであることは疑を容れないのであるから、該制の由來變遷もこの觀察點から究めるのが必要であらう。

然しながら中世史は更に今一つ重要な性質を具へて居るやうに考へられる。博士が封建時代を以て古代末期の不安の世態から生れ出たものとせられ、古代中世兩期を始終一貫した一つの史的過程

として觀察し、中世史の論述上常に古代文化との連絡に注意せられたのはかの舊時中世を以て古代近世の中間に介在した別種の世界と考へた妄見を却けられたもので、大に喜ぶべきことではあるが余輩はこれと少しく異つた立場から中世期を觀察したいのである。余輩は上述の如く中世を以て古代近世兩期の過渡時代とし古代及ゲルマニ兩文化の融合混成を當代の中心事實となすのであるが、しかしこれを依然古代期の繼續であるとは考へずに、一面からこれをゲルマニ民族によつて開かれた新しい歴史舞臺として觀察し純然たる古代期とは或意味から對立的に考へやうとするのである。古代から中世へ移ると、新しい民族新しい土地が歴史に這入つて來るのは、何人も知る如くで、是等の民族、地方は兎に角古代社會の發展と離れた新規の史的道程を歩んで行くのである。新しい民族即ちゲルマニ族中、ゴート、ヴンダル、ランゴバルドは早くローマ屬領内に占住し、彼等の幼稚な原始的生活は優れた文明の力に壓倒され其國家的存在亡ひ其民族的本色を喪失するに至り、又ガリヤ地方に入つたフランク族も著しくローマ化されたけれども、北部のフランク、アングロ・サクソンやゲルマニ本土の諸族は猶其固有の民族的文化を保持し得たのである。勿論中世期に於ける新しい文化現象は主として其發生地を舊ローマ支配地方即ち南歐ガリヤ方面に求めざるを得ない、けれども又一面中歐及北歐に於ける文化的發展を無視する譯には行かない。ゲルマニ族は一面ローマ領を征服して其地に土着し其住民と融合し其文化を吸收したけれども、他面に於て舊ローマ支配圏外のものは單に古代文化を其本土に於て輸入吸收したに過ぎないのである。それで、南歐ガリヤ地方に移住したゲルマニの文化は古代の繼續と觀られるが、本土ゲルマニの文化は矢張別種の發達に相

違ないのであるから、中世期は一面から觀ればゲルマニ民族の古代史に其端を發して居るので、中世の內でもかのカロリンが朝末迄はゲルマニ民族を中心として論ずれば古代期と見做すべきであらう。其故中世は此點から觀ればゲルマニ民族社會發達史であるから、古代文化との對立が了つて仕舞つた近世期に比し、固有のゲルマニ文化社會の登展を知り得ると云ふ意味からして、中世は興味ある時代と稱すべきである。各民族特有の發達進化を研究することが史學の大切な一方面とすれば中世殊に其前期は甚だ重要な時代といふても差支へなからう。

上述の如く余輩は、中世が一面古代、ゲルマニ兩文化の融合混成の過程を示すといふこと、他面に於てゲルマニ民族社會の發達進化を表すといふこと、この二重の意義に於て甚だ興味ある時代と考へるのである。この二ケ條は中世史研究の中心骨子を成すもので、從つて此兩意義孰れよりするも、中世期全般を通じて其變遷推移を究むることが必要であらう。それで余輩は博士が中世史の主要部を封建時代に置かれ、其前期は單に準備時代として說明せられたに止まり、本書に於て所謂中世高潮期の各現象に亘つた普通的面目は巧に描寫され、時代の生命生活の眞髓は把握されて居るけれども、中世生活全般の發展推移といふことが、今一息充分に現はれて居らないのを遺憾とするのである。

四

以上は本書の概觀であつて、全篇を通じて現はれて居る博士の中世史觀に對し聊か愚見を開陳したのであるが、これから書中の特に注目すべき箇所や著者の一考を煩はすべき點などに就いて、余輩の觀た所を述べやう。

本書は大体に於て考證的文句や論辨に偏した處

はなく、極めて平明暢達而も興趣の深い叙説から成つて居るが、其間著者の斯學に對する學識の一端を窺ふべく、讀者に甚大なる稗益を與ふる箇所は頗る多いのである。シ、リー島に於けるノルマンの文化を説かれた條や、（四章、四六―七頁）、英國の『大憲章』の眞意義が民權發達よりも寧ろ封建的特權の恢復にありとせられたこと、（一一章一六六頁）十字軍の一主因を當時の經濟生活に求められたこと（一二章、二〇四頁）など、其例である。第八章「封建制度の由來」は該制度の成因たるべき複雜なる諸事情が極めて周到且つ明快に叙説されて居り、章の終りに附せられた圖表は頗る巧妙に案出されて居つて讀者に至便なものである、しかし余輩は今少しくゲルマニ的要素を重んぜられても宜からうかと考へる。軍事方面に於ける著者の造詣が深いことは、第五章「ビサンツ帝國」中（二六六頁）や第十三章「軍事」中（二一〇―二三三）に窺はれるのである。第九章「封建社會」第十章「封建國家」は中世社會の構成を知るべき重要な部分であつて、著者の簡潔な筆はよく時代の實相を描出されて居るが、前に述べた、事象の發展推移といふことに就いての觀察、叙述の足らないことが、是等の章に於て殊に欠點のやうに見ゆるのである。余輩が特に會心の筆と思はれるのは第十五章「武士物語」で、著者の筆致は此章に及んで一層華麗流暢を極め、當代文學に現れた武士の理想生活は頗る興味深く畫き出されて居る。當代の物語は一面時代生活を寫して居ると共に、これが樂人に吟唱せられて、武士階級の生活、理想を導いた力の偉大であつたことが、他面に於て推想せられるのである。尚又本書中の論述に就いて余輩が多少博士と見を異にして居る箇所もないではない。第七章「チャールス大帝」の條の如き其一例である。由來歴史上に於ける大人物の事業は兎角誇大

視される傾きがあつて、其周圍の事情が及ぼした力も前代からの傳承的事業も盡く一偉人の創始的手腕に歸せしめるのである。チャールス大帝に對する史家の觀察見解も從來此傾向を免れないやうに考へられる。博士は勿論時代の趨勢歷史的推移に注意せられ、極端な大帝崇拜を標榜されては居らないけれども、尙「此くしてチャールス大帝は中世史の分水嶺上に立つて、一面過去の動亂を望み、一面將來の安定を指すの巨像であつた、即ち大帝の名を除いて中世史を語ることは不可能と云はねばならぬ。」と述べられ、大帝出現の意義を重大視して帝國統一、ゲルマン羅馬兩民族調和の大理想、統治並びに文化の上に於ける偉大な創始的功業を讃美されて居る。余輩は元より大帝の人物、その征服、統治文化の上に於ける功業の偉大なるを認めるけれども、大帝を以て新時代即ち眞意義に於ける中世の建設者とし、其創始的手腕を絕對的に稱揚することは如何かと考へる。云ふ迄もなく、大帝は中世初期に於ける古代、ゲルマンニ兩文化融合の大勢を代表して居る偉傑で、ゲルマニ族の社會に羅馬の文化を移植して其開發進化を圖り、羅馬的統一國家の組織實現を計畫したのであるが、しかしこの主義方針はフランク王朝建國の基本的理想であつて、大帝の統治政策內治上の施設は多く前代に其端を發した傳承的事業で、大帝の方策は創始的といふよりも寧ろ祖先の遺業遺策を一層顯著に大規模に實現したものと稱すべきであらう。而して當時ゲルマニ族社會は自然の進化法則の支配を免れないで、その古き秩序組織漸く崩壞し來り、新しい形式の下に其存在の安定を求めつゝあつたので、羅馬文化の移入はこの要求に適應したものであるから、フランク歷代王朝の羅馬化政策はゲルマニ族社會の趨勢に對し好都合なものであり、殊に其征服地たる舊羅馬支配下の地

方統治には極めて必要なことであつたのである。然しながら古いゲルマニ固有の慣習は常に新しい制度組織に對して反抗の氣勢を示し、且つ羅馬、ゲルマニ兩民族性の根本的相違は社會進化の法則に順應すべき新しい形式を、全然羅馬風に求めるといふことを許さないで、矢張ゲルマニ族特有の精神を包容せしめて所謂中世的面目を造らしめたのである。それで歴代王朝はこの反働的氣勢、ゲルマニ固有性を尊重せざるを得なかつたので、吾人がフランク歴代の君主殊に大帝の政策施設を觀察しても、屢々斯樣な反働主義ゲルマニ主義の方針實施に逢着するのである。それで大帝の內政統制策には幾多の矛盾撞着があるけれども、これやがて時代の眞相を物語るもので、この矛盾撞着から中世期の面目特色は發揮されて來るのである。即ち大帝は古代、ゲルマニ兩文化融合の過程に於て、將にゲルマニ民族社會がその原始的形体から中世的形体に移る進化の過渡期に於て最も顯著な光彩を放つて居る箇性であるけれども、これを新時代建設の創始的卓絶的地位に置くのは聊か不穩當と考へられるのである。

五

最後に各章の編制上少しく卑見を述べやう。本書は大体に於て一般讀者に便利なやうに相關聯した概念を順序よく知得して容易に中世生活の眞相を把握せしめる工合に、手際よく各章各節の配列が出來て居る。しかし多少いかゞと思はれる點がないでもない。例へば第十二章「宗教」中にある政教兩權の衝突は當期政治思想上の大問題として寧ろ別章に於て皇帝對法王の題下に說述せられたいやうに考へる、又第十七章「經濟生活」中の自然經濟、大地主制の經濟生活は第九章「封建社會」第十章「封建國家」と相近接した場所で、相關聯した法制經濟史の知識として取扱つて慾しいのである。

尙一般讀書子の爲には書中の外國固有名詞に原語を附せられたいし、又索引の如きもあつて欲しいと思はれる。口繪挿畫は孰れも著者の見識を以て撰擇せられたものだけあつて、讀者に深き興趣を催さしめるものである。

以上余輩は自己の不識を顧みないで猥りに卑見を開陳し、博士の高著に對し妄評を加へたに就いては、切に博士の寛容を仰ぎ更に示敎を乞ふ次第である。而も余輩をして斯の如き迂言妄評を敢てするに至らしめたものは、我西洋史界に、本邦にては新しい試みであり、外國に於ける類書に對しても確かに特色を備へた、價値ある述作を得た歡喜の心情に外ならないのである。

庄園制度之大要

文學博士　吉田東伍著

（大正五年六月十五日發行）

本書は吉田博士が日本學術普及會發行に係る「歷史講座」の第五篇として述作せられたものである。その內容は劈頭先づ開講の心得と題して、庄園研究の困難なる事情と研究の必要なる所以を述べ、以下十七章に分ち庄園の名義より說いて、その起源沿革を詳說し、庄園制崩壞して近世封建の建立の事情を述べて筆を擱いてある。尙餘論として別に江戸時代社會制度の大綱を加へられてゐるが全篇凡そ二百五十頁、此間史料の寫眞版數葉を挿入して讀者に興味を添へて居る。大體に於て簡易平明の叙述で、專門の學者にも、一般の讀者にも歡迎せらるべき好著であらう。

庄園研究は維新以來史學の勃興と共に各種の學者に依つて注意を喚起せられ、研究せられ、又現に盛に考究せられつゝある事項であるが、尙充分なる結果を得られた樣に思はれない。嘗てなされたる最も注意すべき研究としては栗田文學博士の